

永青文庫蔵雑記類より (二) 細川宗孝の死 (2)

著者	西田, 耕三
雑誌名	東光原 : 熊本大学附属図書館報 = Kumamoto University Library bulletin
巻	21
ページ	3-4
発行年	1998-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/10176

1名、5年4名の計7名で複々式授業である。1週間泊まり込みだった。

国語の作文の時間だけ私が受け持つ。従って、1日に1回授業すると、あとは、当校の先生の授業を見学する。学校が終わると、担当の先生(平山義嗣。現、竜北西部小)や校長、地元の人と、教員宿舎で酒をまじえて歓談して時間をすごした。何しろ僻地3級の山の中

の学校だから、これが何よりの馳走なのだ。

7人の児童の中に自閉症の男の子が1人いた。この子が卒業するまで5年間平山先生はここに勤めた。以来今も第七小学校の運動会には平山先生とそして私のゼミ生と私と妻と、応援にかけつける。今年は9月27日総勢14名で、児童5名の第七小学校に行く。

(なかもと たまき 教育学部教授 国文学)

永青文庫蔵雑記類より(二)

細川宗孝の死(2)

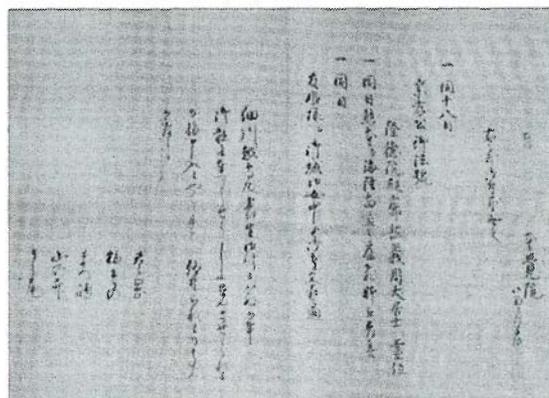
西田耕三

『延享秘録』は、延享4年8月15日から9月22日まで、日をおって宗孝不慮の災難の顛末を記している。日をおってはいるが、直接の記録ではない。事件後、日を経てまとめたものである。ただ、あきらかに細川家側の視点からの記録である。いくつかの項目に分けて摘記しておこう。

〔熊本への連絡〕宗孝の災難は8月15日午前9時頃。その日の午後6時頃に、使番瀬戸角右衛門が早打ちで江戸を立ち、さらに夜になって早打の雇飛脚を差立てている。この雇飛脚は11日後の8月26日午前10時頃熊本へ着く。その夜のうちに目付の生駒十右衛門が熊本を立ち、9月14日江戸着。また、8月27日に熊本を立った用人奥村安左衛門は9月17日に江戸へ着く。往復に1ヶ月を要している。宗孝は8月16日午前4時すぎになくなる。その知らせのために、翌17日、鉄砲頭村井源兵衛が早打ちで立つ。さらに18日に雇飛脚を差立てる。逝去の知らせを受けた熊本から、使番天野善左兵衛が29日に立って、9月21日に江戸着。なお、熊本では9月20日、21日に、宗孝の35日の法事を行なっている。

〔跡式〕宗孝遭難直後に、將軍家から跡式のことは心配なきようにという確認は得ていたが、宗孝死後、重臣たちは心配し、方々に確認を求めている。宗孝の養子となっていた弟の主馬(後の細川重賢)が、支障なく宗孝の跡をつぎ、8月20日から「殿様」と呼ばれる(このことは江戸藩邸の「日記」にもみえる)。

〔友姫〕宗孝の妻友姫へ、8月18日と19日、お城女中および西丸女中たちからそれぞれの主人の気持を伝えるおくやみの手紙が来る。「越中守殿御事、養生御叶なく御死去のよし御聴に達し、御せうしに思召させられ



『延享秘録』、延享4年8月18日の条

候。友姫様御障りも御座なく候やと、御尋あそばされ候御事御座候、かしく」(西丸女中)というもの。友姫は、8月23日から静證院と呼ばれることになる。静證院は紀伊大納言の娘で、重賢と同年。重賢は兄嫁で養母であった静證院に終生孝養をつくす。

〔修理の処罰〕板倉修理の処罰は、宗孝死去の日の夜に行なわれることになっていたが、細川家からの宗孝死去の報告が遅れたこと、ちょうど京都から公家が参向していたこともあって延び、さらに21日は將軍家の差支えのある日に当たり、22日に行なわれることになった。しかし、その日になっても何の沙汰もないので問い合わせたところ、江戸城奥向きの能舞台の新築に伴う能興行のために延引、ということがわかる。これらの情報を細川家に提供したのは、若年寄本多伊予守の奥医師で、細川家へも心安く出入していた武田叔安老である。細川家の重臣たちが、一日も早く修理を処罰してもらい、藩士の不満を静めようとしていることが、これらの記述から伺われる。修理の切腹は23日。

〔お城坊主〕事件直後から、お城坊主の詮議が行なわ

れている。お城坊主は、将軍家と諸大名の間、大名間のスムーズな関係のために不可欠の存在だったが、それゆえに表向きの役割を逸脱することを警戒された存在でもあった。この事件で処分を受けたのは3人。最も重く、扶持を召し放たれた星野久悦の場合はこうである。宗孝が小用所の前にいるところへ久悦が通りかかった。宗孝は手拭を久悦に預け、小用所へ入った。久悦が待っていると、小用所の奥の方で下駄の音がして、騒がしくなった。久悦が二本戸の間から覗きみると、暗いので相手は誰とも見分けられなかったが、刃物が光り、切り合いの様子であった。久悦は「前後を忘却」して蘇鉄の間の方へ立退いた。この久悦の行為が「不行届仕方不埒」であったのである。久悦はどうすればよかったのか。「御目付又は御徒目付江成共早速可申達」であったのである。後の2人は「叱り置」かれた。ともに「四品以上揃の点懸役」であったが、山田清喜は、自分の持場をあげ騒動の所へ行ったこと、吉田長佐は、逆に、手負いの者を見かけながら目付又は徒目付へ連絡しなかったことが、咎められた。長佐

の場合、役儀専一と考えたと判断されたから、この程度の処分ですんだのである。公の処分はなかったが、宇田川玄覚のような場合もある。玄覚は熊本藩出入りのお城坊主だったが、8月15日、事情があつて登城が遅れた。辛うじて事件後の様々の用事には間に合ったが、その不調法を恥じて、今後細川家への出入りはやめたい、と藩の重臣に願書を提出している(実際にどうなったかは記されていない)。

〔加藤卯左衛門〕加藤卯左衛門は板倉修理の用人で、心気よろしからぬ修理を江戸城へ出仕させた責任者である。すなわち、事件後、修理の屋敷へ赴いた花房近江守と堀田兵部は、このところ修理は不快ゆえ、登城させないように前々から加藤に申し付けておいたのに、差し留めなかった、と言って、加藤の不屈きを咎めている。8月21日に、加藤は入牢、忤喜内は座敷牢という処分。加藤の立場は後に実録の世界で肥大していくが、この段階でのこの情報がどこからもたらされたのか、私には判断できない。

(にしだ こうぞう 文学部教授 国文学)

他大学と目録システム〔雑誌コース〕とILLシステム地域講習会を共同開催

附属図書館では、6月29日から7月3日まで、目録システム講習会〔雑誌コース〕とILLシステム講習会を開催しました。この講習会は、全国約500大学等で目録業務の効率的処理を行うために利用している総合目録システムNACSIS-CATと、他大学等から複写物等を迅速に取り寄せ、研究者等に提供するため利用しているNACSIS-ILL(Inter-Library Loan:図書館間相互貸借)システムの操作法を習熟することを目的に実施しているもので、学術情報センター以外に全国の大学等で地域講習会として開催されているものです。

本学では平成3年度(ILLシステム講習会については平成7年度)から毎年開催していますが、目録システム講習会が図書コースと雑誌コースに分かれて以降、今回初めて雑誌コースを開催しました。特に地域講習会としては初めての試みとして、目録システム講習会〔雑誌コース〕は九州地区大学図書館(九州大学附属図書館、熊本大学附属図書館、鹿児島大学附属図書館)および学術情報センターとの共同開催、ILLシステム講習会は熊本県内大学図書館(熊本大学附属図書館、九州ルーテル学院大学図書館)との共同開催という形態をとりました。受講生は本学職員以外に県下をはじめ、福岡、佐賀、長崎、大分、鹿児島、宮崎の大学図書館

等から20名の受講がありました。

また、この講習会は、単にシステムの操作方法を習得するだけでなく、全国の大学等で共同分担入力しながらデータベースを構築することの意義や、学内の教官・学生から全国あるいは海外の図書館利用者に対して迅速に情報提供するための図書館間協力事業の重要性を再認識する機会にもなっています。(電子情報係)

